二

南門を潜(くぐ)り抜けた。雨は勢いを弱めている。
「時遷殿、戻る時の支障になる。あの衛兵達を片付けよう」
民家の裏に隠れた後、公孫勝がそう時遷に言った。
「分かりました。では私がしておきます。公孫勝様は、早く曹瑛殿のもとへ」
公孫勝が何か言いかけたが、黙って頷いた。時が惜しい。それは二人の共通の思いだった。
「では、時遷殿に頼むとしよう。十人ほどいるようだが」
「半刻※。それで終わらせます」※半刻　約十五分。
ちょっと出かけてくる、その程度の答え方だった。
公孫勝は、後ろも振り向かずに宮城へと駆けた。嵐が幸いして、人に見咎(みとが)められることもなかった。
南門の半里※ほど手前で、主のいない水月に出会った。残月と蒼月を見ると、嬉しそうに駆け寄って来た。水月は何かを訴えるような目をしている。南門のすぐそばに、三頭の馬を残してきた。嵐なので、人に見られることもない。城門を守る兵士も、監視所に詰めたままだった。水月はようやく落ち着いたようだった。残月と蒼月は、そんな水月を慰めるような素振りをしていた。※半里　約二百五十メートル。
宮城に近い辻に、兵達の一団がいた。装備や兵の質から見て、廂軍(しょうぐん)であろうと思われた。一営はいる。公孫勝は足を止めた。
「中から出てくるぞ」
隊長らしき男が叫び声を上げた。
「何人だ」
副隊長とおぼしき男が兵達に訊いた。
「四人です。いえ、後ろから三十人ほどの者達が……」
最前列の兵士が答えた。
「何だと。どいつらだ、いったい」

隊長が忌々しげに唾を吐いた。
すぐに兵士達が後ずさりした。
宮城の正門から、二人の男達が出て来た。一人は大斧をかざした軍人らしき男で、もう一人は驚くほど背の高い、棒を持った男だった。
「おまえ達、退いてくれないかなあ」
背の高い男が兵達に言った。静かだが、気で威圧するような声だった。
兵達が、気を呑まれたように後ずさる。
隊長が焦ったように叫んだ。
「何をしている。こんな少人数に、何を引き下がっている。かかれ、かかるんだ」
そう言う本人の腰が引けている。
副隊長を先頭にして、兵達が一斉に襲いかかった。
二人の男達が、棒を回し、大斧を振るった。みるみる兵達が倒れ込んだ。
正門から続けざまに矢が飛んで来た。曹瑛だ。公孫勝は胸を撫で下ろした。生きていてくれた。そのことだけで、他にもう何も望まなかった。
公孫勝が辻の蔭から飛び出した。両手に短梢子を握っている。
「曹瑛」
これが公孫勝の声かと疑うほどの大声だった。
正門の中から、紛れもない曹瑛の姿が現れた。
「公孫勝様……」
曹瑛の目に、うっすらと涙が浮かんでいる。
公孫勝が短梢子を振るった。兵達の兜が宙を舞った。五百の兵団は、後ろからも崩れ出した。公孫勝は手当たりしだいに兵達の頭を潰していた。門の中から槍を手にした若者が飛び出し、兵達の横を崩し始めた。鮮やかな槍捌きだった。
若者の後から、三十人ほどが出て来た。固まって兵達を押し込んでいる。公孫勝は厚い壁を崩し続けていた。もう少しだ。曹瑛と公孫勝

の間には、二十人ほどの兵しかいなかった。曹瑛も矢を放ちながら公孫勝を見ている。公孫勝が一気に十人ほどの兵を蹴散らした。はじめて見るような、果断な攻撃だった。続く十人も、あっという間に弾(はじ)き飛ばされた。

「公孫勝様、わたしのために……」

そこからは声にならなかった。曹瑛は涙を流しながら、公孫勝を見つめていた。

「曹瑛、無茶しおって……」

公孫勝も声を詰まらせていた。

軍人ふうの男が近付いて来た。

「曹瑛殿のお仲間か。私は楊佶、禁軍都虞侯をしていました」

公孫勝は、その名を聞いて思い出した。黄玉と戦ったという大斧の将校。

「黄玉から聞いております。では、あの槍の若者が」

「そうです。息子の楊林です」

「あの背の高い好漢(こうかん)は」

「杜遷殿。摸着天(もぢゃくてん)と呼ばれる杜遷殿です。この辺りの侠を束(たば)ねています。我々に助力してくれたのです」

「なぜ、侠の頭(かしら)が」

公孫勝が、不思議そうな顔をした。

「ずっと、ことの成り行きを見ていたらしい。そして、助けに入るのが遅かったと悔やんでいました」

「どうして侠達が助力してくれるのかは分からぬが、とにかく助かることは事実だ。楊佶殿は何故(なにゆえ)」

「私は、国のために働くのがつくづく嫌になったのです。長年地方禁軍の中にいて、様々な不正や理不尽を見せられてきました。宋が、国としてまともなものを持っていたなら、私もそうは思わなかったでしょう。ですが、この国はすでに老いています。いえ、腐りきっています」

公孫勝は何も答えなかった。国に対しての想い。自分の生き様に対

しての想い。それは人それぞれで、誰も評価など出来ないものだった。世に害悪を流す場合を除いてだが。
「御子息は」
「あれは、既に宋家党に入っているつもりです。皆さんの承諾も得ぬうちから」
「いい若者です。きっと宋雪華殿も、快く迎えることでしょう」
廂軍は、たった三十人ほどに押されている。軍といっても、まともな軍事教練など受けたことのない寄せ集めだった。本気になった腕利きの三十人を前に、逃げ腰になるのは仕方のないことなのかもしれなかった。
「来たぞ、来た。一気に押し返せ」
廂軍の隊長が怒鳴った。見ると、反対側の辻から、新たな廂軍の一団が駆けつけていた。
「まずい。いくら廂軍といえども、これだけの数になっては」
楊佶が、新たな廂軍の方に走り出した。公孫勝と曹瑛も続いた。
新たな廂軍は、たった二人とたかをくくっているようだった。
「こ奴らを蹴散らせ」
隊長らしき男が叫んだ。
楊佶がぶつかった。三人ほどの兵が、血を撒き散らせて真横に飛んだ。楊佶の大斧の横薙ぎだった。間髪を入れずに、公孫勝が敵兵の中に飛び込んだ。面白いように兵達が崩れ落ちる。十人、二十人、公孫勝は無人の野を歩いているようだった。曹瑛も矢を放っている。十人ほどが首を射抜かれている。二人とも、容赦する気はないようだった。
「ええい。押し包むんだ」
隊長が怒鳴り声を上げた。
兵達は、その声に応えて三人の周囲を取り囲んだ。宮城前の大路は広いといっても、さすがにこれだけの兵士に囲まれると、動きが取れなくなりそうだった。
「楊佶殿、囲みを破るぞ」
公孫勝が決死の覚悟で言った。公孫勝にさえ、かなり危険な賭けだ

った。さきほどの廂軍よりも、訓練された部隊のように思われた。特に、隊長の質がよさそうだった。

「出来ますか」

楊佶が呟いた。

「やるしかない。私が隊長を狙う。楊佶殿は曹瑛を」

言うやいなや、公孫勝が隊長を目指して囲みに突入した。

その時、公孫勝は微かな油の匂いを嗅いだ。次の瞬間、廂軍の輪の中に劫火が立ち上った。火炎球。公孫勝が左手の民家の屋根を見た。

「公孫勝殿、遅くなりました」

時遷だった。手には数個の火炎球の紐を握っている。

「ほれ、こいつを喰らえ」

時遷が次々に火炎球の紐に火を点けている。雨もほとんど上がり、火を点けるのに手間取ることはない。

そこかしこで劫火が上がった。石油を使っているので、普通の油よりも火勢が強く、黒々とした煙が、より恐怖心を煽る。

廂軍が逃げ出し始めた。幾人もの兵が、炎に包まれて踊っている。

時遷が屋根から飛び降りた。隊長の真上だった。隊長の頭に、短めの剣が突き立っている。こともなげに、時遷が剣を引き抜いた。隊長は、頭から血を噴き上げて崩れ落ちた。

時遷を先頭に、四人は楊林達の戦いに加わった。火炎球が投げられた。さきほどの火炎球の威力を、遠目に見ていた兵達は、我先にと逃げ出し始めた。先の隊長が真っ先に逃げ出した。そのため、火が上がった時には、兵達の姿はほとんど見られなかった。

「よし、このまま南門まで」

公孫勝が全員に号令をかけた。一団は、一気に駆け抜けた。南門までおよそ二里※。すぐに辿り着ける距離だった。

※二里　約一キロメートル。

南門が目に入った。目を疑った。五百人ほどの兵達が南門を固めている。いつの間に。公孫勝は歯軋りした。

「門衛が死んだのに気付いたか」

時遷が呟いた。
見ただけで精強さが分かる兵達だった。こういう廂軍もいる。公孫勝は、場違いな感想を抱いた。要は、指揮者の資質の問題なのだ。どんな惰弱な兵であっても、指揮者が根気よく訓練すれば、このくらいの兵には育つ。それはまた、広くこの国全般にも言えないだろうか。上に立つ者がしっかりしていれば、少なくとも今日のような屈辱的な外交はなかったはずだ。そして、歳幣という貢物を差し出すための民の苦しみもなかったのではないか。公孫勝は、そんなことを考えていた。
「俺達が」
杜遷の声だった。
「俺達がここを食い止める。いいな、皆」
俠達が一斉に肯いた。
「頭、ここは漢の死に所ですぜ。いい舞台を回してもらった」
「そうだ、義のためにこそ漢は死ねるんだ」
俠達が口々に声を上げた。
杜遷は、下腹に力が湧き上がるのを感じた。
「分かった。おまえ達の命、この馬鹿な俺に預からせてもらおう」
俠達の間に、歓声が湧き上がった。
「私も共に戦わせてくれ」
楊佶が静かに言った。
「楊都虞侯がですか。俺につられて馬鹿におなりに」
「どうやら、そうらしい」
二人は声を上げて笑い合った。
「公孫勝様」
時遷が公孫勝に呼びかけた。
「あれを」
時遷の指し示す先に、櫓があった。城郭内に時を告げる鐘楼らしかった。
「あそこの上から城壁に行けます」

そう言って時遷は、背負った麻袋から鈎縄を取り出した。
「その手があったか」
公孫勝は大きく頷いた。
櫓から城壁までは、およそ三十歩※。櫓の方が少し高い。
※三十歩　約三十六メートル。
「楊佶殿、杜遷殿。ここを頼めるか」
そう言って、公孫勝は櫓と鈎縄を指差した。二人はすぐに了解した。
「楊林も連れて行ってほしい。役に立つはずだ」
楊佶が言った。
「分かった。確かに有能な若者だ」
公孫勝が答えると、楊林が楊佶の顔を見た。
「父上……」
楊林の心配そうな声に、楊佶が声を荒げた。
「楊林、女々しい男になるな。おまえは宋家党のために力を尽くすのだ。私はもういい歳だ。宋家党の足手まといになりかねん。おまえは若い。若すぎるほどにな。父は、おまえの働きを楽しみにしている」
楊林は、それ以上何も言えなかった。
「楊林。父はおまえを誇りに思う」
楊林の目から、涙が一筋零れ落ちた。
「行きます、父上。父上の子で、私は幸せでした」
楊佶も目を瞬かせている
「行きましょう」
時遷が促した。
櫓に登った。南門の手前で、激闘が繰り広げられている。
時遷が鈎縄を投げた。二回目で、うまく城壁にかかった。時遷は縄を十分に張り、素早く櫓の柱に縛り付けた。
「曹瑛殿、しっかりと私につかまるのだ」
時遷が言った。そして、二尺※ほどの長さの縄を取り出した。その縄を張られた鈎縄の上にまわすと、一端を歯で、もう一端を右手で握った。※二尺　約四十四センチメートル。

「なるほど、これは時遷殿にしか出来そうにない」
公孫勝が感心して言った。
時遷は左手を曹瑛の胴にまわすと、一気に櫓を蹴った。
二人の身体が、勢いよく城壁に向かって滑って行った。
瞬く間に、二人は城壁の上に降り立った。時遷が縄を投げてよこした。一端に鉄輪を嵌めているので楽に届く。公孫勝が受け取り、両手を使って滑り降りた。楊林も同じように城壁に滑り降りた。
「さあ、気付かれないうちに」
時遷がそう言って、鈎縄を城壁の外に垂らした。
まず、時遷。そして、曹瑛が城壁の外に降りた。
「さあ、楊林。父上の心を分かってやれ」
公孫勝は、戦っている父を見続けている楊林に声をかけた。
「はい」
思い切ったように頷くと、楊林は鈎縄を伝って城壁の外に降り立った。公孫勝も最後に降り立った。
「楊林。父上に恥ずかしくないように生きるのだ」
公孫勝が、楊林の目を見て言った。
「はい。父の誇りにかけて」
楊林の目は、湖水のように澄んでいた。

・・・・

「杜経略使様の命令だった」
平真が、落ち着いた声音で言った。
小屋の中には、蝋燭が点され、夜間の見張りと傷付いた晁蓋を除いて、おもだった者のほとんどが集まっていた。ただ公孫勝、時遷、そして曹瑛の顔がないのが寂しさを誘っていた。
「杜愔がな……」
言ったのは、九天玄女だった。
「私にも、どうして経略使様が、そのような命令を出したのかは分か

りません。ただ、私もそうしたかった。それだけは確かです」
九天玄女が、じっと平真の顔を見つめている。
「儂らのためにか」
李逵が言った。
平真は答えに窮したようだった。
「この者は、来たくてここに来たのだ。不思議な縁よな。地英の星よ」
九天玄女が嬉しそうに言った。
「地英の星」
李逵は驚いて九天玄女を見た。
「そうだ。この者もまた、新しき世を創りだす仲間だ。この者の言葉は信頼に足る。そう心得よ」
九天玄女が、断固とした口調で言った。
「ううむ……」
李逵は、腕を組んで考え込んだ。一目見て、悪い男ではないと感じた。ただそう簡単に、潜入のための芝居ではないと、心を許してもいいのだろうか。
「李逵、平真殿は信用出来ます」
雪華だった。
「ですが」
「平真殿が侵入者と戦った様は、とても演技などでは出来ません。わたしは戸の後ろから、一部始終を見ていました。石勇とともに、平真殿は、自らの命も顧みず戦っておられました」
「その通りです。わたしがあの男と戦えたのも、平真殿が大勢の敵を引き付けてくれたからです」
黄玉も口添えした。
「分かった、信じるとしよう」
李逵が折れた。
「それで、これから杜愔はどう出て来そうだ」
平真は少し考え込んでいた。

「経略使様は、優れた武人です。おそらく、武人としての務めを果たされるかと」
「ということは、最後まで戦い抜くということか」
それもそうだろうと、李逵は思った。これだけ太原府に近いのだ。兵站の心配はないだろうし、損害を受けたといっても、全体から言えば、微々たるものであることは間違いない。むしろ、長期戦になればなるほど苦しくなるのはこちら側だった。
「ただ杜愔は、暗殺のような卑怯なことは許せなかった。そういうことか」
「それもあると思います。もう一つ、経略使様はこの戦を楽しんでおられる。そう思える時がありました」
「楽しむ……」
陳達が呟いた。
「楽しむという言葉が不適当なら、充実した御様子だった。そう感じるのです」
「それは分かる」
李逵が答えた。
「優れた軍人なら、そう思うことはあるだろう。儂も、この苦しい戦いを、どこかで楽しんでおるのかもしれん」
陳達も頷いている。
「その充実した戦いに、あの男達が卑怯な手段を持ち込んだ。それに対する怒り」
聞起だった。
平真は、聞起を見て頷いた。
「どっちにしても、これからも戦いは続くってことだね」
陳統が、うんざりしたように言った。陳統には、疲れの色が見える。聞起も同じだろう。李逵はそう思った。最も激しく動き回ったのがこの二人だった。さすがに朧月と弦月には、疲れらしい様子は見られなかったが、人の方にはかなりの疲れが出て当然だろう。
「何のために、わたし達は戦っているのでしょう」

ぽつりと、雪華が言った。その言葉に、少しの間沈黙が流れた。
「天魁の星よ。これは宿命と心得よ。何のために戦うか。そんなことは、その立場によって変わるものだ。何が正しいか。それも、その者が寄って立つ側によって異なるのだ。しょせん、人は自らが信じる正義しか認めることは出来ぬのだ。そうであるなら、自らが信じる正義を貫くしかない。そして、その正義を評価するのは他者に委ねるしかないのだ」
九天玄女が沈黙を破った。
「それはそうでしょうけど」
「天魁の星よ。おまえは、ここで果てたいか。おまえが夢見る、民が笑顔で朝を迎えられる世を、見たくはないのか」
「それは……」
「そうであるなら、おまえは生き延びねばならぬ。こんな所で果ててはならぬのだ。だから戦う。ただそれだけのことだ」
「姉様、玄女様の言われる通りです。こんな理不尽なことのために命を奪われるなど、許すことなど出来ません」
黄玉が言った。
「それはそうと、その黒衣の者達というのは」
李逵が訊いた。目は、平真を見ていた。
「経略使様に、少しだけ教えていただきました。蔡京の子飼いの兵で、黒死軍と言うそうです」
「黒死軍……。だが話を聞けば、とても兵士とは思えんが」
「戦をするような軍ではないとのことです。蔡京の私兵、それも暗殺や諜報、破壊工作などを任務としている。そんな集団だと思います。名目上は、童貫の下で禁軍に組み込まれています」
「そんな奴らがどうして」
李逵には理解し難いようだった。
「その者達については、私から説明しよう」
九天玄女だった。
「知っておられるのですか」

黄玉が言った。黒死軍の頭領と、黄玉は死闘を演じていた。辛勝した、と言えるほどの苦しい戦いだった。聞きたいのは当然と言える。

「知っている。そのもとを創ったのは、この私だからな」

雪華が、黄玉が、そして小屋の中にいる全員が、九天玄女の次の言葉を待った。

「前にも話したが、私は開封府で父の手助けをしていた時、諜略だけでなく、暗殺にも手を染めていた。それも、十人や二十人という数ではなくな」

「そう言っていましたな」

李逵が神妙な顔つきで言った。

「その時に集めた者達が、黒死軍の母体となった。主に諜報を担当していた者達が、時遷の父親を中心としてその後も私についてきた。だが、暗殺を担当していた者達は、父が宮廷を離れると同時に、地に潜ったのだ」

「その後のことは、玄女様も分からないのですね」

聞起が言った。

「詳しいことはな。だが、時遷がその後も監視していたようだ。蔡京が、黒死軍としてその組織を復活させたのも知っていた。蔡京はな、恐ろしい男だぞ。不倒翁※などと揶揄されておるが、恐ろしく頭の切れる男だ。そして、自らを守るためには手段を選ばぬ。金も権力も力もある」※不倒翁　起き上がりこぼし。

「賄賂好きで有名だからな」

陳統が言った。

「そうだ。だが、その賄賂で貯めた金を、そうした陰の力に回している。若い頃は、それなりに正しい心を持っていたのだが」

九天玄女は、遠くを見るような目をしていた。

「蔡京を知っているのですか」

訊いたのは、雪華だった。

「若き日、ともに理想を分かち合った。蔡京は、父を助ける有能な少壮官僚だった。弟の蔡卞は、知っての通り父の娘婿だ。今は宮廷を離

れているがな。」
「蔡京が、玄女様の真似をして黒死軍を創ったというわけか」
　聞起が考え込んだ。
「真似ではない。今の黒死軍は、私の頃のものとは比べ物にならない。その数も、その力も」
「ですが、なぜそのような者達が姉様を」
　黄玉が訊いた。
「分からん。ただ、一つ言えることは、阿骨打のことが蔡京には気にかかったのだろうということだ」
「そのことは、経略使様も気にかけていました。宋雪華殿、あなたは本当に遼と手を結ぼうとしていたのですか」
　平真の顔は真剣だった。返答によってはこの場を去る。そんな表情をしている。
「平真様。阿骨打将軍との約束は、ここでお話するわけにはまいりません。ですが、誓って遼と手を結ぼうというものではありません。むしろ、その逆。どうか、信じてください」
　雪華は、真摯に平真に訴えた。
「地英の星よ。おまえも感じてはおるだろう。この天魁の星が、おまえを騙すような者かどうか」
　九天玄女の言葉に、平真は黙り込んだ。
「どうだ、信用出来ないか」
　平真は、首を横に振った。
「儂もその席におった。だから話の内容は知っておる。阿骨打との約束だから、中身を話すわけにはいかんが、嬢さんの言っておる通りだ。違っておったら儂の首をやる。儂の首では足らんか」
　李逵が言った。平真の答えはない。
「平真さん、あんたこれからどうするんだい」
　陳達が訊いた。
「分からない。経略使様からは、黒死軍を阻止せよとしか言われていない。実は私も、これからどうしていいのか分からないのだ」

平真は、当惑しているように見えた。
「地英の星よ。これも何かの縁と思え。おまえは、杜愔に命じられただけでここに来たわけではないだろう」
九天玄女が、平真を見詰めた。
「それは……」
「とりあえず、杜愔のもとに戻るがよい。そして、自分の本当の気持ちを伝えるのだ。どんな結論を出しても、おまえの本心からの言葉なら、杜愔は必ず聞き届けるはずだ」
「どうしてですか」
「この任務をおまえに任せた。それはな、おまえを最も信頼しているからなのだ」
「それはそうだな。もしこれが逆の立場なら、儂も一番頼りにしておる者に任すだろう」
李逵も賛同した。
「経略使様は、私に何を……」
平真は顔を俯けた。
九天玄女が平真の手を取った。
「心の赴くままに。きっと、杜愔はそう思っておる」
平真は、手から不思議な暖かさが広がってくるのを感じた。それは、忘れかけていた母の温もりを思い出させた。

・・・・・

公孫勝は亀伏山の麓にいた。雨は、もうすっかり上がっている。それまでの嵐が嘘のように、頬を撫でる風は心地よい涼しさを孕んでいた。
「もうすぐ陽が落ちる。月が出ているので、砦に着くのには問題ないだろう」
公孫勝が時遷に言った。
「奴等に気付かれないようにしませんと」

「大丈夫だろう。あの二人も、水月であれば」
二人は、水月に乗っている曹瑛と楊林を見た。曹瑛が前、それを抱くようにして、楊林が手綱を握っている。二人を乗せても、水月の走りに遅滞は見られなかった。むしろ、曹瑛が戻って元気一杯という様子だった。
「似合いですな」
ぽつりと時遷が漏らした。公孫勝も、優しく二人を見つめている。
「いいものだな。こういう眺めは」
曹瑛は山を見詰めている。楊林はその後ろで、少し頬を赤らめていた。
「こういう若者達を、悲しませたくはないものだ」
公孫勝の声には、しみじみとした感慨がこもっていた。
「公孫勝様のようにはいきませんが、私にも何か手伝いが出来る。そう思えてきました。こんな気持ちになったのは初めてです」
時遷の目には、うっすらと涙が滲んでいた。
「時遷殿、あなたがいなければ、ここまで鮮やかにことは運ばなかった。感謝している」
「公孫勝様。私など……。ただ、曹瑛殿が死を覚悟して太原府に向かったと聞いた時、それは順序が違う、そう思ったのです。まして、こんな素晴しい娘さんだ。代わりに自分が。そうも思いました」
「順番から言えば、私の方が時遷殿より先に死なねばならぬ。次は李逵殿か」
「それを言うなら、一番先は玄女様です」
二人は、声を上げて笑った。楊林が驚いて、慌てて水月から降りた。
「何でもない、楊林」
公孫勝が声をかけたが、自分のことを笑われたのかと勘違いして、楊林はますます顔を赤らめていた。
「初々しい若者だ」
公孫勝が時遷に呟いた。時遷も頷いた。
「我々大人は、若者達の礎とならなければな」

公孫勝の言葉は、自らに言い聞かせるようでもあった。
「その通りですな」
時遷も、感に堪えないといった様子だった。
陽が、いよいよ山の端にかかって来た。
「急ぎますか」
時遷が促した。
「うむ」
公孫勝が楊林に目で合図した。楊林は照れながらも、曹瑛を前に抱いて水月を走らせた。
麓に沿って暫く走ると、入り口の西側に二百人ほどの集団が目に入った。いでたちは農民ふうだった。山に入ろうとして躊躇っている。そんな様子だった。
「農民……かな」
時遷が訝しげに呟いた。
公孫勝は、敵ではなさそうだと感じていた。訓練された様子が見られない。たとえ官軍が偽装したとしても、ここまでの無秩序さは、演技で出来そうにはない。
一団は、公孫勝達に気づいたようだった。先頭に二人の男が、鋤を構えて警戒している。公孫勝はゆっくりと近づいた。
「寇小父さん、それに宋小父さんも」
後ろから声がした。曹瑛だった。鋤を構えた男達の、緊張が解けたようだった。
「曹瑛、どうしてこんな所に」
「それは、わたしが聞きたいわ。宋家村に戻ったはずでは……」
「戻った」
寇汪だった。李逵に言われて宋家村に戻されたのを、曹瑛は知っていた。
「この人達は」
公孫勝が訊いた。
「宋家村の人達。わたし達の仲間」

曹瑛の言葉に、宋伸が叫んだ。
「そうだ、俺達は仲間だ。だから、お嬢さんのために何かしたい。そう思ってここまで来たんだ。死ぬのなんか恐くない。お嬢さんを見殺しにするなんて、俺達には出来ないんだ」
「曹瑛、俺は黒旋風に砦を出された。黒旋風は、俺のためを思ったんだと思う。恨んじゃいない。でも俺は、どうしてもお嬢さんの役に立ちたい。そりゃあ、大したことが出来るわけじゃない。でも、矢の一本でも、盾代わりに受けたいんだ。そんな程度じゃしょうがないのは分かっているが、俺達全員、そんな気持ちでここまで来たんだ」
寇汪が、絞り出すように吐露した。
「小父さん……」
曹瑛が頭を下げた。仲間、皆仲間なんだわ。心の中で、曹瑛は噛みしめていた。
公孫勝と時遷は顔を見合わせた。どうしたらよいか。そう考えているようだった。楊林は、黙って寇汪達を見つめている。
「何でもいい、俺達にだって何か出来るはずだ。どんなことだってする。だから、俺達も加えてくれ。頼む」
寇汪が、膝をついて頼み込んだ。宋伸も膝をついた。残りの者達も、一斉に膝をついた。
「公孫勝様……」
曹瑛が公孫勝を見た。
公孫勝の顔に、突然閃きのようなものが現れた。
「これは……これはうまくゆくかもしれぬ」
公孫勝の声は、興奮で震えている。
「どうしました」
時遷が訊いた。
「時遷殿、砦の上の塘※を憶えているな」
※塘　水を堰き止めて造った人工の池。大きさにはかなりの幅がある。
「ええ、砦の水がめとして、蘇源が自然の池を堰き止めたのでしたね」
「この嵐で、塘は満杯になっているはずだ」

「あっ」
時遷が手を叩いた。
「それは妙案だ。公孫勝殿、いけますぞこれは」
「これだけの人手があれば」
「一晩で堰を崩すことが出来る」
「水を導かねばならぬが」
「出来ぬことはなさそうですな」
「もともと農民だ。兵達よりも仕事は早い」
「そうですな」
二人は頷き合った。
曹瑛は二人のやりとりを、黙って聞いているだけだった。
「皆、私は公孫勝という。李逵殿とともに、宋雪華殿を守るべく戦っている者の一人だ」
公孫勝の声は、大きくはないがよく通った。寇汪達は、真剣に公孫勝の言葉に耳を傾けている。
「皆に頼みがある」
寇汪が、はっきりと安堵の表情を見せた。
「砦の上の塘から、水を落としたい。辛い作業にはなるが、出来ぬことはないと思う。やってくれるか」
公孫勝の問いかけに、宋伸が答えた。
「俺は、川の堰を造ったことが何度もある。要は、その逆ってことだ。まかせてくれ」
「公孫勝様、俺は暫く砦にいたので、塘のことは知っている。出来んことはないと思う。それで、どのくらいの日数で」
寇汪が訊いた。
「出来るだけ早く。可能なら、今晩中に」
寇汪が絶句した。塘は見ていた。大きくはないが、けして小さなものではなかった。堰も見ていた。大きな岩があったのを憶えていた。一晩で出来るか。寇汪は自信が持てなかった。確かに宋伸は水の扱いに慣れている。汾水の護岸工事や、堰を造って田に水を引くのは宋伸

の仕事だった。だが、あの堰は固い岩で出来ている。それだけではない。その水をどこかに引かねばならないのだった。
「公孫勝様、どこに水を」
寇汪が訊いた。
「砦へ」
公孫勝の返答は、たった一言だった。
「やってみます」
寇汪と宋伸が、同時に答えた。
公孫勝は、静かに肯いた。
「場所は分かるな」
時遷だった。
「はい。ですが、この先に五人の禁軍兵士が見張っています。それで山に入れないでいたのです」
寇汪が恥ずかしそうに言った。意気込みだけはあるが、実際に兵士を見ると、どうしていいか分からないようだった。
公孫勝は時遷を見た。
「やってくれるか」
「五人なら、半刻で」
時遷が返答した。
公孫勝が肯くと、時遷が蒼月を山の方に走らせた。
「寇小父さん、村は」
曹瑛が訊いた。
「大丈夫だ。太原府から役人が来たが、伍氏がうまくあしらった。もちろん、村人でおまえ達の不利になるようなことを言う者はいない。奴等、何も得ることなく、二日で引きあげて行った。お嬢様の館も、荒らされずに済んだ」
寇汪が、自慢げに話した。おそらく、村人一丸になって役人に抵抗したのだろう。曹瑛はその光景を思い浮かべると、感謝の気持ちで心が満たされるように感じた。
「では、誰も捕らえられた人はいなかったのですね」

「猫の子一匹、連れて行かせはしない」
宋伸が胸を張った。
「よかった……」
曹瑛は、胸を撫で下ろした。
ほどなく、林から時遷が飛び出して来た。
「十人いました。林の中にも潜んでいたのです。禁軍も慎重です。」
「すべて片づいたのか」
「少し時はかかりましたが」
「すまない。ついでと言っては申しわけないが、塘までついて行ってほしいのだが。禁軍に見つからないように。時遷殿がついていてくれれば、安心していられる」
公孫勝が済まなそうに言った。
「分かりました。これは大事な任務だと思います。私も公孫勝様にお願いがあります。砦に着いたら、李逵様を塘に遣ってください。堰は岩だらけです。あの方の職能が生きるかと」
「そうだな、李逵殿は、元は石切り場の監督をしていたのだったな。分かった。着いたら、すぐ頼んでみよう」
「そういうことで」
「頼む、時遷殿」
時遷は、寇汪達を連れて山に分け入った。
「曹瑛、戦が終わるかもしれぬ」
公孫勝が曹瑛を見た。
「本当ですか」
「可能性はある」
公孫勝の顔は自身に溢れている。
「まさか、今頃砦が陥ちているなどということはありませんか」
「大丈夫だろう。李逵殿が必死に木戸を支えていた」
「わたしが勝手に抜けたので、李逵様に迷惑をかけてしまいました」
「それはその通りだ。勝手な行動は慎まねばならぬ」
「罰は覚悟の上です。それに、まさか生きて戻れるとは思っていませ

んでした。公孫勝様をはじめ、楊佶様、そしてここにおられる楊林様、時遷様、杜遷様、侠の皆様のおかげです。この御恩を胸に刻み込んで、わたしは、どんな罰でも受けようと思います」

曹瑛の言葉に、公孫勝は何も答えなかった。

「行くぞ」

公孫勝が力強く言った。

残月と水月は、並んで山の中に駆けて行った。